

Ⅲ 学会および誌上発表抄録

1. 学会・誌上发表

(1) 東海・近畿・北陸地方における酸性雨の現状

青山善幸

平成10年度日本水環境学会中部支部講演会

(1998年10月、福井市)

全公研東海・近畿・北陸支部の16研究機関では、共同調査研究会を設置し、自治体の枠にとらわれない広域的な酸性雨調査を統一手法により実施した。元年度から8年度までの調査結果をもとに、東海・近畿・北陸地方における酸性雨(酸性雪)の現状について考察、以下の結果を報告した。

- ① 清浄地域を含め、冬期に酸性成分濃度が高くなることから、北西季節風によって長距離輸送されている可能性が考えられる。
- ② 日本海側における酸性成分の沈着量が冬期に大きく偏っていることから、森林や陸水などの生態系に与えるストレスの増大が懸念される。
- ③ 冬期は、中和に働く塩基性成分濃度が太平洋側の方が高いため、pHは日本海側が太平洋側より低い。乾燥状態で強風が吹くため土壌の舞い上がりが影響しているものと考えられる。
- ④ 酸性成分および塩基性成分の濃度は、太平洋側が日本海側より高い。

(2) 環境情報の地図化手法の検討について

八幡仁志、宇都宮高栄

第25回環境保全・公害防止研究発表会

(1998年11月、岡山市)

情報を地図化する場合、種々の目的によって蓄積されている環境関連情報の収集・整理を行うとともに、地図化された情報を修正・加工・提供しやすいように一元管理しなければならない。

そのためには、開発や修正が容易で視覚表現にも優れているWindowsプログラムによって地図化を図る必要がある。また、この地図化された情報は、音声や動画を取り入れたインターネットの利用にも適している。

研究発表会で、環境科学センターで行ったWindowsプログラムとインターネットに対応させた地図化の結果を報告した。

(3) 栄養剤添加による重油分解・除去技術試験

加藤賢二

第13回全国公害研究協議会東海・近畿・北陸支部研究会 (1999年2月、伊勢市)

平成9年1月2日、約19,000ℓのC重油を積んだロシア船籍タンカー・ナホトカ号が隠岐島沖で分断し、沈没した。船首部は北西の強風を受け漂流した後、同月7日、当県三国沖で座礁し、流出重油による深刻な海洋汚染を日本海沿岸にもたらした。

7月の海水浴シーズン前には、重油汚染の影響はほとんど見られなくなったが、人が入れない岩場や海岸には依然として汚染が残っており、自然浄化にたよらざるを得ない状況にあった。

そこで、海水があまり浸らない岩場を想定し、栄養剤添加により、常在する重油分解細菌の活性を促進するための手法の有効性について検討した。

2. 所内研究発表会

環境科学センター・衛生研究所・原子力環境監視センター・食肉衛生検査所との第27回合同研究発表会

1. 日時 平成11年3月8日(月)

2. 場所 環境科学センター会議室

発表演題

① 栄養剤添加による重油分解・除去技術試験

主任研究員 加藤 賢二

② 都市河川の汚濁解析について

主任研究員 坪川 博之

③ 北潟湖流域における農業汚染実態調査について

技師 西澤 憲彰

④ 有害大気汚染物質調査について

主任研究員 植山 洋一

⑤ 大気汚染監視のグローバルネットワークについて

主任研究員 山田 克則